

1 ペトロ

今日は、二千年に及ぶキリスト教の、その基礎をつくった、基礎となった一人、イエス・キリストの一番弟子と言ってもいい、ペトロについて話をしてみたいと思います。教会の人にも、いま学校で聖書を勉強している人にとっても、少しでも役に立てばよいと思っています。

少し前、六月頃でしょうか、カトリックの現在のローマ法王、アルゼンチン出身のフランシスコが、この秋、何十年かぶりで来日する、広島や長崎を訪問する、それが決まったというニュースがありました。

私たちはプロテスタントといって、今から五百年前、カトリック教会の中から起こった宗教改革によって、カトリックから別れてできた教会です。もちろん根っこ(聖書)は同じです。

カトリックというのは、皆さんよくご存じのように、イタリアのローマから始まった教会です。本部というか、法王がいるのはバチカンという、ローマ市内にある世界で一番小さい国です。そこに建っている大きな教会が聖ペトロ教会、大聖堂というわけです。

ペトロ教会となぜ言うかという点、理由があり、その場所はシモン・ペトロが殉教じゆんきやうの死をとげたところ、埋葬されたところと伝えられているからです。カトリックはこのペトロから自分たちは始まったと考えていて、ローマ郊外の、かつて丘であったバチカンの地に教会を建てたのです。

ペトロの殉教、じつは彼もイエスと同じく十字架につけられた、しかも逆さ十字架につけられて殺されたといわれています。聖書にはそれをはっきり書いている箇所はないのですが、暗示している文句があります。それ今日の箇所です。

「・・・年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、生きたくないところにつれて行かれる」。ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである(一八〜一九節)。

ここには十字架という言葉こそありませんが、とくに「両手を伸ばして、他の人に帯を締められ」というところなど、昔から磔はりつけにされることと関連づけて理解されてきたところです。

ペトロが十字架につけられ死んだことについて昔から知られた伝説があります。これは聖書の次の時代に書かれた文書に残されている話で、それをもとに書かれたシェンケヴィッチという人の小説(映画にもなった)『クオ・ヴァデイス』で私たちに知られています。

この小説の終わり頃に、ペトロが出てきます。時代は、紀元六〇年頃、ですからイエスが死んで三〇年、イエスの弟子たちが、キリスト教の伝道のためにさかんに活動していた時です。しかしこの時代は、とくに皇帝ネロという名前が有名ですが、ロー

マ帝国がクリスチャンをひどく迫害していた時です。ペトロも、教会の信者たちの勧めもあって、激しい迫害のつづくローマを離れようとしています。つまり逃げだしたわけです。

有名なアッピア街道を南下して、ローマの町をまさに出ようとしたとき、逆にローマの町に入ろうとする人とペトロはすれ違うのです。ナザレのイエス、それに気づいた彼は、主よ、どこへ行かれるのですか（これがクオ・ヴァデイスの意味。ヨハネ一三・三六）と後ろから尋ねます。するとこの方、たしかにナザレのイエスは、ローマに行ってもう一度十字架につくと答えます。ペトロは気を失って倒れてしまうのですが、やがて起き上がり、彼は、もと来た道を引き返し、ローマの町に戻って、十字架につけられて殺されたと伝えられています。その場所にあるのが、バチカンのペトロ大聖堂です。二十世紀に入って発掘調査も行われ、ペトロとおぼしき遺骨なども発見されているようです。

2 その信仰

これだけ聞くと、ペトロという人は、どんなにか信仰の強い人、特別の人であったかと私たちは思います。

特別な人だったことは、その通りですが、しかしそれはみな神様の恵みを受けてそうであったと思います。福音書、使徒言行録を読むと、ペトロの人物像は、少しおつちよこちよいだけで、憎めない。しばしば失敗し、イエスに怒られたり、しかし弟子たちの最年長者としてみんなから一目置かれていた。信仰はきわめて単純で素朴、そんな人となりが浮かんできます。本名はシモン、ヨハネの子シモン（一五節）。しかしイエスは、彼の性格をはじめから見抜いたのでしようか、ケファという別名を与えています。ケファとは、イエスと弟子たちが使っていたアラム語で「岩、岩石」という意味で、それがギリシャ語のペトロになります。岩のような、それが彼にはぴったりの名前だったのかも知れません。

聖書の伝える、じつに興味深い人物ペトロ、その生涯の中から、今日は、二つだけ取り上げます。一つはペトロの信仰の告白、もう一つは、彼の失敗です。信仰の挫折といってもよいものです。

はじめにすぐれた信仰という面です。
ペトロは、ご存じのようにガリラヤの漁師でした。十二人の弟子の中にペトロと同じ漁師が四人います。お分かりと思いますが、ペトロ、その弟アンデレ、そしてヤコブとヨハネの兄弟です。決してインテリではない。あえていえば労働者です。漁師としての労働の最中に、突然イエスの、わたしについて来なさいとの招きを受けて従って行ったのです。

さてついては行ってしまったけれど、イエスのことを分かっていたのだろうか。分かってついて行く場合と、ついて行っているうちに分かるのと、二つのパターンもありあるとすれば、この場合明らかに後者です。イエスの宣教活動に従い、彼と生活を共にし、その教えと訓練を受けて、自らもイエスと同じ宣教活動を行っています。そのうち分かってきたのです。

ペトロがどういった信仰をもってイエスと共に歩んでいたのか、イエス自身が問いかける場面があります。フィリポ・カイサリア地方に行つたときのこと、イエスは弟子たちにこう問いかけます。「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と。すると弟子たちは、いろいろ答えます。「洗礼者ヨハネだ」と言っている人もいます。「エリヤ」だと言う人もいます。「預言者の一人だ」という人もいます。世間でのイエスの評判を紹介します。

しかし一転して今度はイエスは、君たちは、わたしをどう思っているのかを問いかけます。

「それでは、あなたがたはわたしを何者だというのか」。ペトロが答えた。「あなたはメシアです」（マルコ八・二九）。

「あなたはメシアです」。じつに見事な答えです。ペトロは弟子たちみんなを、いわば代表して答えています。

「メシア」とは、旧約の昔からイスラエルの民が待ち望んでいた救い主です。王です。この方がこられれば、民はいろいろな抑圧から解放され、神を王とする神の国が来ると期待していたのです。メシアはヘブライ語ですが、そのギリシヤ語がキリストです。ですからペトロは、イエス様、あなたこそ、キリストですと信仰の告白をしているのです。

もちろんここでは、まだイエスが十字架につけられる前のことです。十字架の身代わりの死によって、私たちみんなの罪があがなわれ、きよめられ、そこに本当の神の国が来るというところまでは、ここでは行っていない。しかしそこへと通じる言い表しが、ここでペトロを通してなされたのです。そう考えると、このペトロの力強い告白の言葉からキリスト教が始まった、そこに揺るがない教会の基礎が置かれたと言えると思います。

ペトロという人は、はじめついてこいと言われて行ったのですが、その中でイエスを正しく知り、正しく言い表した。イエスの招きだけでここまで来たペトロが、他の弟子たちとともに、信仰において成長していった姿を私たちは知ることができるようになります。

3 従う

次にペトロの失敗に触れなければなりません。信仰の挫折です。しかしペトロは失敗をへて、それを乗り越えて、そう言つてよければ、信仰において強くなつていったといつてよいと思います。そこに私たちも触れないわけにはいきません。ペトロはしかし、自力でそうなつていったのではない。ひたすら神の赦しと恵みによって強くされていったのです。

十字架への道を歩みつづけるイエス。最後の晩餐を終え、弟子たちとオリブ山に向かいます。ゲッセマネの園、そこで最後の祈りがささげられるはずです。そこに行く間で、次のようなやりとりがあった（マルコ一四・二七〜三一）。イエスは、自ら

の十字架の死が弟子たちに与える衝撃を念頭において、こう言います。「あなたがたは皆わたしにつまずく」。これに対してペトロはこう言います。「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」。本当に心から彼は言ったのです。するとイエスはさらに言います。「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うであろう」。このイエスの予告は的中してしまいます。

イエスが捕らえられ、大祭司の屋敷でユダヤの裁判を受けているとき、弟子たちがみな逃げ去っていたのに、ペトロだけは、その庭まで入り込み、様子をうかがっていました。しかし、そこにいた大祭司の女中の、あなたも中で裁判を受けているイエスと一緒にいたという、何気ない言葉を、ペトロは強く否定し、それが三度に及ぶのです。その時二度目の鶏が鳴きます。福音書は、こう書いています。「ペトロは、『鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣き出した」。彼の大失敗です。彼はまったく立ち直れないほどになってしまったのです。

さて今日の聖書に目をとめて見ましょう（一七節）。

三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」。ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます」。イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい」（一七節）。

これは十字架の死の前ではなく復活後の出来事です。復活は、イエスを十字架につけた者たちの罪もふくめて、すべての人の罪が贖われたことのはっきりした神の宣言です。イエスは死で終わらなかつたということ、神のみこころがなつたということ、救いがすべての人にもたらされた、神の国がきたことのしるしです。

その恵みがペトロにも与えられます。ペトロは、ただたんに罪ゆるされるだけではないのです。特別の使命が与えられます。宣教の使命です。それだけでなく、教会の群れを牧す務めです。

しかし、わたしを愛するかと、三度もイエスに問われたとき、少し心が折れかけたようです。数日前三度イエスを否んだことが、ありありと心に思い出されたからです。その時ペトロは、すべてを、自分の全部を神に明け渡します。「主よ、あなたは何もかもご存じです」。神を知るといふことは、神に知られていることを知ることです。しかしそれは恐ろしいことではないのです。安心なことなのです。隠すことが何も無いからです。そうです、私はあなたを裏切ってしまった、そんな弱い人間であることを、あなた自身がよく知っています。その上で、あなたをわたしが愛していることも、知っておられます。ペトロはそこから出発するのです。ありのままを神によって知られ、ありのままをお委ねすることから出発するのです。そして従って行きました。死に至るまで従って行ったのです。

（二〇一九年八月一日）